

1. 「発掘調査だより」について

村北遺跡の発掘調査を始めてから3ヶ月が経とうとしています。すっかり秋らしくなってきました。今月も発掘調査だよりをお届けいたします。

この「発掘調査だより」については、市ホームページ (<http://www.city.agano.niigata.jp/soshiki/gakushu/23743.html>) にも公開しています。合わせてご覧ください。

2. 調査のようす

6月より調査を進めてきたC区では、8月11日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、調査を完了しました(写真1)。8月号でお伝えしたように、土器や石器の集中する場所では遺構が見つかっています。特に東側に偏る傾向が見られ、東隣のD・E区を調査することによって、より詳しい傾向が明らかになるかもしれません。

お盆明けからはA区の発掘調査を進めています。これまで調査していたC区と同様、A区でも縄文土器の出る地層を掘り下げるところから始めました。

A区で見つかった縄文時代の川跡の岸边では、縄文時代後期中葉(約3,500年前)と考えられる香炉形土器が出土しました(写真4)。昨年度に出土した破片と合わせて1個体になるようです。県内では30例あまりしか発見されていない珍しいものです。

8月には村北遺跡を活用して、イベントが開催されました(写真2・3)。

8月7～18日は、ドイツからの留学生2名が研修を行いました(写真2)。掘削作業だけではなく、写真撮影や図面作成、出土した土器の洗浄など仕事内容は多岐に渡ります。留学生は、日本の文化や考古学を専攻していて、ヨーロッパと日本の発掘調査方法の違いに戸惑いつつも楽しみながら勉強していました。様々な作業を通して、日本の考古学に対する理解を深めてもらうことができましたと思います。

8月28日と9月8日には児童の発掘体験、見学を受け入れました(写真3)。28日の発掘体験では、熱心に発掘作業に取り組んでいました。実際に発掘をして、土器が出た時のにこやかな笑顔は忘れられません。これからも阿賀野の歴史に関心を持ってほしいと思います。



写真1 村北遺跡 空中写真(南から)



写真2 留学生作業風景(土器の洗浄)



写真3 児童発掘体験

3. 出土した土器とこれからの課題（第1図）

縄文時代から、土器は生活に大きく関わってきており、時期ごとに形や模様の流行がありました。それぞれの時期や地域に特徴的な土器は、「～式土器」のように代表遺跡の名前をとって名付けられています。例えば、村北遺跡の下層調査で最も多く見つかった土器(第1図3・4)は、縄文時代後期前葉(約4,000年前)に県内で流行した「南三十稻場式土器」と呼ばれています。このように出土した土器の年代を調べることは、遺跡を理解するうえで大切なこととなります。

村北遺跡から出土した土器を年表と対応させてみると、土器が出土した時期は縄文時代中期前葉(第1図1)・中期末(同2)・後期前葉(同3・4)・後期中葉(同5)・晩期末(同6)で、土器の途切れる時期が複数あることが分かります(第1図)。このことから、村北遺跡では後期前葉には土器が多いため比較的長くムラが続いたものの、中期前葉・中期末・後期中葉・晩期末の土器は少なく、キャンプのような一時的な滞在だったのだらうと思われまます。

後期中葉の土器は香炉形土器のほか小型の壺が出土しており、日常生活に使う土器ではなく、マツリ(お祈りやおまじない)に用いられた特殊なものです。大きなムラから離れた場所で一時的にマツリを行っていたのかもしれませんが。

今後の調査では、縄文人が何のために村北遺跡に短期間滞在していたのかを探るため、引き続きA区の調査を進めていく予定です。

<参考文献>

縄文セミナーの会 2012 『第25回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』

國學院大學文学部考古学研究室 2013 『縄文時代異形土器集成図譜1』



写真4 今回出土した香炉形土器(A区)



写真5 下層の調査風景(A区)



第1図 出土した土器の年代